

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：菅井 美香（教育心理学コース）

■ 研究題目
ADHD 者の時間感覚に時間の表示方法が与える影響
■ 研究代表者・分担者 氏名
菅井 美香（教育心理学コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
【目的】 注意欠如・多動性障害（Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder：以下 ADHD）者は主観的な時間経過が極端に早いことが知られており（McGee ら, 2004），これについて江頭・岡田（2020）は、「時間知覚のズレが」「ADHD 児者の日常生活での困難と関連している可能性がある」と述べる。また、折原（1998）は、時間のイメージや時間的評価が時間不安と深く関連することや、不安感覚が個人の時間的評価や時間イメージによって大きく異なることを指摘している。これらのことから、ADHD 者の時間感覚が不安感や日常生活の困難と関係していると考えられるが、ADHD 者の時間感覚とそれによる困難との関係についての研究は行われていない。また、タイムエイドには経過時間と残り時間を表示できるものがあるが、どちらの表示方法がより効果的であるのかの検討はなされていない。そこで本研究は、ADHD 者の時間感覚と時間の表示方法の関係について探索的に検討することを目的とする。
【方法】
質問項目
1. 参加者特性 参加者特性として、年齢、性別、ADHD 診断の有無をたずねた。
2. 時間不安尺度（生和・内田, 1992） 時間不安を測定する尺度として、生和・内田（1991）の時間不安尺度を使用した。この尺度は不安尺度と苛立ち尺度、それぞれ 10 項目から構成される。「全く当てはまらない」から「全くその通りだ」の 5 件法である。
3. SDQ（Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) 日本語版（Goodman, 1997））

情緒の問題、行為の問題、多動 / 不注意、仲間関係の問題と総合的困難さ、および向
社会性因子それぞれ 5 項目で全 25 項目である。3 件法で評定される。子どもの情緒や行
動についてのスクリーニング検査であるが、成人に対しても用いられる (Findon et al.,
2016)。

4. 時間の表示方法の違いと焦りの程度に関する質問項目

本研究では実際に課題を行うのではなく言語的な教示をもって時間的切迫状態をつく
りだす。課題遂行状態を説明する文章を読んだ後に「○分経過しました」「あと○分です」
という質問に対して焦りの程度を SD 法 (7 段階) で回答する。質問は計 10 個であり、
他の尺度の間に 5 個ずつに分けて挿入した。

調査実施方法

本調査は、2020 年 12 月に Google フォームを用いて民間調査会社を通じて行われた。

倫理的配慮

本研究は、東北大学大学院教育学研究科の倫理審査委員会の審査を受け、承認を得たう
えで実施した。(承認番号: 20-1-052)

【結果】

参加者特性

研究協力者は、TD 者 497 名、ADHD 者 5 名 (TD 者: 男性 273 名、女性 224 名; ADHD
者: 男性 5 名、女性 0 名) であった。平均年齢は TD 者 41.8 歳、ADHD 者 41 歳 ($SD=9.8$,
 $SD=3.6$) であった。SDQ の得点が 7 点以上の人と診断ありの人を合計してリスク高群、
それ以外の人をリスク低群として分析を行った。

時間不安測定尺度

1. 記述統計

不安得点は、全体、リスク高群、低群がそれぞれ 33.3, 37.1, 33.2 であった。苛立ち
得点は 30.3, 33.6, 30.2 であった。

2. 下位尺度間の相関

リスク高群の不安得点と苛立ち得点は 1%水準で有意な相関が認められた ($r=0.60$)。
リスク低群の不安得点と苛立ち得点は 1%水準で有意な相関が認められた ($r=0.51$)。

3. リスクの程度による下位尺度得点の違い

時間不安測定尺度の各下位尺度について、リスク高群とリスク低群で得点の比較を行う
ため、対応のない t 検定を行った。その結果、全ての下位尺度において、5%水準で有意
な差が認められた。

SDQ

1. 記述統計

情緒の問題は全体、リスク高群、低群がそれぞれ 4.0 点、6.7 点、3.9 点であった。行為

の問題は、1.3点、3.2点、1.3点であった。多動 / 不注意は3.3点、7.0点、3.2点であった。仲間関係の問題は、4.4点、5.5点、4.3点であった。向社会的な行動は4.9点、4.8点、4.9点であった。総合的困難さは13.0点、22.3点、17.6点であった。

2. 下位尺度間の相関

リスク高群の総合的困難さは、情緒、行為と1%水準で有意な相関が認められた($r=0.62$, $r=0.84$)。また、多動 / 不注意、仲間関係とは5%水準で有意な相関が認められた($r=0.51$, $r=0.53$)。リスク低群の総合的困難さは、情緒、行為、多動 / 不注意、仲間関係、向社会的な行動と1%水準で有意な相関が認められた($r=0.56$, $r=0.58$, $r=0.57$, $r=0.61$, $r=0.57$)。

3. リスクの程度による下位尺度得点の違い

SDQ の各下位尺度について、リスク高群とリスク低群で得点の比較を行うため、対応のない t 検定を行った。その結果、向社会的な行動以外の全ての下位尺度において1%水準で有意な差が認められた。

時間不安尺度の下位尺度とSDQの下位尺度の相関

リスク高群では、SDQ の情緒と時間不安尺度の不安尺度、苛立ち尺度の間に1%水準で有意な相関が認められた($r=0.71$, $r=0.60$)。リスク低群では、SDQ の情緒と時間不安尺度の不安尺度の間に1%水準で有意な相関が認められた($r=0.60$)。

時間の表示方法の違いと焦りの程度に関する質問

いずれの教示を行ったときでもリスク高群の焦りの程度がリスク低群の焦りの程度よりも大きかった。ADHD 診断あり群では経過時間表示の焦りの程度は残り時間表示の焦りの程度よりも大きくなっていったが、リスク高群ではそうした違いは認められなかった。

【考察】

ADHD リスク高群はリスク低群と比べて時間不安の程度も焦りの程度も大きいことが分かった。ADHD 者は気分障害を併発することが知られており(篠田・沢崎, 2012), 時間制限がある課題に対して焦りを感じたためと考えられる。また, ADHD 児の中には特別な配慮が行われず叱られる経験が多いことで自信が持てなくなる子どもがいることも指摘されるなど(松本・山崎, 2006), 幼少期からの経験が影響を与えている可能性も考えられる。

また, ADHD 診断あり群では経過時間表示の焦りの程度は残り時間表示の焦りの程度よりも大きくなっていった。課題を始めてからどのくらいの時間が経過してしまったかが表示されることで残り時間が表示されるときには見通しがつくが課題終了時間までの見通しが立てられるが, 経過時間表示では全体の時間を把握した上で自分がどれくらいの作業を行わなければいけないかを考える必要があるために見通しを立てることが難しく焦りの程度が大きくなったと考えられる。

時間をうまく管理できないことによる不安や焦燥感が大きくなることで, 二次的な障害

と関係する可能性が考えられる。成人の発達障害者の支援の文脈では、自己管理スキルに焦点が当てられることが多く（竹内・園山, 2007 他）、時間管理の困難さも精神的なストレスに影響すると考えられる。そのため、今後より効果的な時間表示の方法について実際の生活場면을想定した研究が行われることが求められる。

【文献】

- 江頭優佳, & 岡田俊. (2020). 注意欠如・多動症における時間知覚の最新知見. *日本生理人類学会誌*, 25(4), 109-115.
- Findon, J., Cadman, T., Stewart, C. S., Woodhouse, E., Eklund, H., Hayward, H., ... & McEwen, F. S. (2016). Screening for co - occurring conditions in adults with autism spectrum disorder using the strengths and difficulties questionnaire: A pilot study. *Autism Research*, 9(12), 1353-1363.
- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: a research note. *Journal of child psychology and psychiatry*, 38(5), 581-586.
- 松本陽子, & 山崎由可里. (2007). 小学生における ADHD 傾向と自尊感情. *和歌山大学教育学部紀要 教育科学*, 57, 43-52.
- McGee, R., Brodeur, D., Symons, D., Andrade, B., & Fahie, C. (2004). Time perception: does it distinguish ADHD and RD children in a clinical sample?. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32(5), 481-490.
- 折原茂樹. (1998). 時間展望と時間不安・TypeA・生活テンポについて——心理的時間と精神健康——. *国士舘大学文学部人文学会紀要*, 31.
- 生和秀敏, & 内田信行. (1992). 『時間不安の測定』. *広島大学総合科学部紀要. III, 情報行動科学研究*, (15), 71-85.
- 篠田直子, & 沢崎達夫. ADHD 特性をもつ大学生の特徴と大学生活への適応. *目白大学心理学研究*, 8, 49-62.
- 竹内康二, & 園山繁樹. (2007). 発達障害児者における自己管理スキル支援システムの構築に関する理論的検討. *行動分析学研究*, 20(2), 88-100.